

資料1**不登校の子ども・若者の主体形成と支援
—当事者によるシンポジウムでの発言から支援を考える—**

立命館大学大学院教職研究科教授 春日井敏之

2003年京都市内に、不登校をキーワードに子育てを考えるグループとして、「親子支援ネットワークあんだんて」が誕生した。「不登校の親の会」としての交流から始まり、個別相談、不登校やひきこもりの当事者を含めた若者の居場所づくりや交流会、シンポジウム、出版等、活動は広がってきた。私は、当初から10年間余りご縁を得て関わり続けているが、当事者等によるシンポジウムにおいて、何度もコーディネーターとして参加する機会を得て、その都度新鮮な気づきを得てきた。たとえば、2015年に開催された12周年記念シンポジウム「経験者が語る不登校・ひきこもり支援」にかかわり、4名の若者から課題を抱えながらも少しずつ回復してきたプロセスを伺うことができた。その時の発言をいくつか紹介し、不登校・ひきこもりへのネットワーク支援のヒントにしてもらえればと考えている。報告者は、いずれも20代の若者であった。AさんとBさんは女性の社会人であり、大学卒業後、それぞれNPOの若者支援や大学における学生相談活動にかかわっていた。C君とD君は男性の大学生であり、それぞれ臨床心理系の学部1年と大学院1年に在籍していた。

①小中学校・高等学校の頃のこと**Aさん**

- ・高校の時、担任が生徒からいじめられているのを見ていて嫌だった。
- ・進学校で勉強のことも息苦しさがあった。
- ・不登校になり留年、退学後、高卒認定を取得し大学へ。

Bさん

- ・中学校の時、学級が荒れていた。いじめられて不登校になる。
- ・家にいられてほっとした。
- ・高校も荒れていて、いじめにあい不登校。退学後、高卒認定を取得し大学へ。

C君

- ・クラスや集団になじみにくく、幼稚園の頃から欠席していた。
- ・人に自分の思いを伝えるのが苦手だった。
- ・一年間の前半は行けるが、後半は欠席していた。単位制高校卒業後大学へ。

D君

- ・中学校の時、担任の先生とのトラブルで行きづらくなった。
- ・高校は中退し通信制高校へ。
- ・大学受験のための予備校に5年間通い大学へ。その後、大学院進学。

②回復のきっかけ**Aさん**

- ・学校にいけないということは、自分にとってはあり得ないことであったが、家族が「休

んだらええやん」と言ってくれた。

- ・高卒認定もやりたいと言ったら、「やってみたら」と言ってくれた。
- ・家族が、そっとしてくれていた。家のことを頼んでくれて、「ありがとう、助かるわ」と言ってくれた。

Bさん

- ・あったかい雰囲気のスクールカウンセラーとの出会い。今の仕事につながっている。
- ・主治医が、「思い切って休んでみたら」と言ってくれたこと。
- ・高校中退後に行ったあったかいサポート校の先生との出会い。

C君

- ・小学校で別室登校していた時の先生との出会い。フランクで楽しかった。その先生に会いに学校に行っていた。
- ・中学校でのスクールカウンセラーとの出会い。
- ・高校での同じような経験をしている友人との出会い。

D君

- ・中学校で家にこもっている時、友人が家に寄ってくれた。
- ・通信高校の時、友人と毎日ゲームセンターに通っていたこと。
- ・釣りをしている時、ボーっとしている時間がよかった。
- ・予備校の先生との出会い。よく声をかけてくれ、待ってくれていた。

③家族とのかかわり

Aさん

- ・車いすに乗ってでも学校は絶対に行こうとしていた自分だったが、遅刻や早退につきあい、ゆっくり休みと言ってくれた。
- ・ゲームにのめり込んだ時にも、母は心配してのぞいていた。
- ・家族には申し訳ないと思っていたが、母が「元気にいてくれたらいい。ありがとう」と言ってくれた。

Bさん

- ・中学校で不登校になりかけた頃、「行け」と玄関に引きずり出されて、動けなくなっている自分がいた。
- ・高校を中退した後のサポート校の見学に、一緒について行ってくれた。したいことを応援してくれた。
- ・大事な時にそばにいてくれた。気持ちを受け入れてくれた。見守ってくれていた。

C君

- ・親は優しい方で、あまり怒られたことはない。一か月に一回くらいは、母から「学校に行かへんのか」と言われていた。
- ・「何を考えているのかわからん」と言われて辛かったが、それでも応援してくれていた。
- ・親に言えないことは、友人や先生に言えていた。

D君

- ・初めの頃、学校に行こうとすると朝トイレに行く自分に対して、母は「腹筋が弱いから筋トレしろ」と言っていた。
- ・母は、病院、宗教、漢方薬等、いろんなところに連れて行った。一回家で暴れて、バットで壁を割ったことがあった。

・予備校の時、「あんたと私の生き方は違う。あんたはゆっくり流れる川。あんたのペースでやったらいい」と母が言ってくれた。

④仕事のこと

Aさん

- ・不登校シンポジウムなどへの参加から、同じ思いをしている子どもとの出会いがあった。
- ・自分の経験を語ることで、何か役に立つのではないかと思った。
- ・様々なボランティアも経験し、自分は心理的な援助を通して、何かお役に立てることができればと思った。

Bさん

- ・中学校の時のスクールカウンセラーとの出会いが大きかった。お姉さん的な存在への憧れがあった。
- ・人を助ける仕事への関心があって、心理・社会福祉分野の大学へ行った。
- ・自分の経験を活かせる仕事を通して、誰かに返していけたらいいと思う。

C君

- ・学校にはほとんど行けてなかったが、スクールカウンセラーとの出会いが、憧れになった。臨床心理系の大学へ。
- ・誰かのために、何か少しでもきっかけになればと思う。

D君

- ・魚釣りが好きで、生物学への関心もあったが、お世話になった分の恩返しをしたいと思って、臨床心理系の大学、大学院へ。
- ・自分が不登校の時、味方がいなかった。よりそう一人になりたいと思った。

⑤自分の経験と仕事のこと

Aさん

- ・自己分析をしたり、スーパービジョンをしてもらっている。
- ・言いたいことを言えないとモヤモヤしてしまうので、メモをしておく。後で見直して、言語化したり、面接に生かしていつている。
- ・すぐに「大変だったね」と思ってしまうが、「大変だったね」の一言で片づけないように、何がどう大変だったのか理解するようにしていきたい。

Bさん

- ・相手のしんどさを想像して共感しやすい。
- ・相手のしんどさに飲み込まれてしまうことがある。相手との境界線がなくなって、自分がしんどくなることもある。そんな時は、職場の同僚（上司）に聴いてもらう。情報交換も大切にしている。

⑥当時の気持ちと変化

Aさん

- ・「このまま人生終わりや。ずっとひきこもりかな、ニートかな」と自己否定の沼にズブズブとはまっていた。
- ・「休み」と親が言ってくれて、少し元気になっていった。ぬり絵、編み物、刺繍など、やりたかったことを全部してやろうと思った。

・できることが増えると、自己否定からの回復ができていった。嫌なことがあっても、「何とかなる。まっ、いいか」と置いておけるようになった。

Bさん

- ・いじめられて自己否定になっていた。私のせいだと自分を責めていた。
- ・今でも、周りに謝りたいと思っている自分がいる。
- ・でも、いじめを受けたことは否定しないようになった。

C君

- ・初めのうちは、「自分だけ何で行けへんのやろうか」と思っていたが、だんだん学校にいけない自分に慣れてきた。
- ・学校にいけない自分を受け入れて、これでやっていこうと思うようになった。こんな感じで、無理しないでやっていこうと思っている。
- ・「小学校のしんどさと比べたらたいしたことない」と思えるようになった。

D君

- ・中学校から予備校の時まで、「こんなつらい思いをして、何で俺は生きているのか。生きている意味はあるのか」と思ってきた。
- ・今は、「あれだけ辛い思いをしてきたから、できることがあるかもしれない」と思っている。

⑦当時の自分にかけた一言

Aさん

・学校行けなくなったくらいで、人生終わらへんで。まだ早い、先のことは先で考えたらいいよ。

Bさん

- ・そのままでいいよ。

C君

- ・だいたいのは、何とかなるよ。

D君

- ・もういいよ。頑張らなくていい。

ここには、不登校からの回復にとって、子ども・若者が願っている保護者、教師、スクールカウンセラー、予備校等の支援者、友人などからの支援のあり方について、率直な声が詰まっている。特に保護者が、学校に行けていないわが子の存在をそのまま受けとめるところから、支援の扉が開かれていくことが、4名それぞれの語りから明らかになってきた。また、不登校からひきこもりの長期化に向かわないための支援のあり方についても、本人が自前のエンジンにスイッチを入れるきっかけになったようなエピソードが語られている。支援を受けた子ども・若者が、進路選択、生き方の選択の一つとして、支援者になっていくプロセスやその際の課題、スーパーバイザーの存在の意味についても、体験を通して語られている。

(出所) 春日井敏之・櫻谷真理子・竹中哲夫・藤本文朗編 (2016) 『ひきこもる子ども・若者の思いと支援—自分を生きるために—』三学出版 より一部抜粋